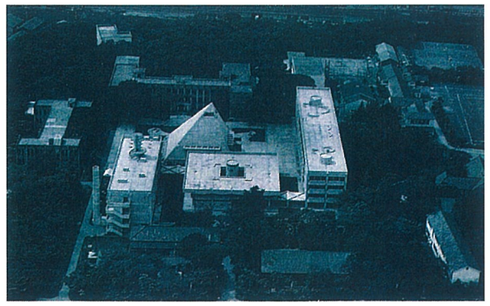
シンポジウムのその先に

前川建築設計事務所代表取締役所長　橋本　功

当初4月頃に予定されていたシンポジウム開催が、その後コロナ禍の影響を受け9月に延期となり、さらに収まらぬコロナ禍の拡大により参加者のオンライン配信で、2021年9月18日シンポジウム「講演会：前川國男と学習院大学」は開催された。主旨は「建築家前川國男による学習院大学キャンパス計画を資料とともに振り返り、現存する前川建築群の遺産価値の再確認」。主催は学習院大学文学部フランス語圏文化学科、共催は学習院大学文学会・学習院大学図書館・学習院大学史料館・学習院アーカイブズである。

学習院大学目白キャンパスには、1962年「学習院創立85年・私学再建15周年」にむけた記念事業の一環として、当時の安倍能成学習院院長に設計を依頼された前川の1960年竣工のピラミッド型の大教室を囲む本部棟、北1号館、南2号館の校舎群と1963年竣工の図書館、そして1983年竣工の南5号館があった。しかし本部棟は1991年、大教室は2008年に解体され、現在は大教室の跡地はピラミッド広場と名付けられて残っている。

7月10日、学習院大学史料館による図書館、北1号館、南2号館、南5号館の写真撮影の立会要請を受け、久しぶりに各建物をつぶさに見る機会を得た。竣工時コンクリート打放しの図書館、北1号館、南5号館の外壁や内部は、さすがに改修により白く塗装されていたが、それでも前川建築の特徴である空間構成の設えやディテールは健在で、これも改修後の復元と思われる前川カラーが鮮やかに残されていた。そこには前川が1960年代に取り組んだ空間手法による前川建築が、60年経てもなおゆるぎない存在感を放っていた。



竣工時のピラミッド校舎群　南2号館（左）、本部棟（手前）、北1号館（右）　1960年

講演にむけて

講演にむけて、自らに課した課題は、2つのテーマ「現存する前川建築群の遺産価値」と「前川國男による学習院大学キャンパス計画」について参加者にとって単なる建築分野の話としてでなく、如何に身近な話として理解してもらえるかということであった。

1909年（明治42）の目白キャンパス配置図
『学習院目白の学び舎』（学習院大学史料館編）より転載

周知されるように目白キャンパスには、正門はじめ乃木館（旧総寮部）、洋風に和風様式を取り込んだ北別館（旧図書館）、東別館（旧皇族寮）、ネオ・ゴシック様式の南1号館（旧理科特別教場）、西1号館（旧中等科教場）等々、我が国の明治・大正・昭和を彩る近代建築史上の貴重な文化財建造物があり、その見た目にもわかりやすい佇まいが伝統あるキャンパス風景の歴史を漂わせている。こうした文化財建造物が佇むなかで前川の建築はどのように理解されているのであろうか。

前川建築の歴史的・意匠的・技術工法的視点の解説は、それなりの理解は得られたとしても、一つの見聞・知見の習得で終わるだろう。そこで私が描いた講演のイメージは、現代を生きる学習院大学キャンパスという「場」は、先人たちが創造し継承してきた歴史のエネルギーが蓄積されて今日があるという実感と、その実感から得られる「場」への共感により、その歴史的な俯瞰のなかに前川建築の遺産価値を見出すことに繋がっていくことが出来るのではないかという思いであった。

前川建築群の遺産価値

そこで、前川國男が「我が国の近代建築・モダニズム建築をリードした建築家」というキャッチコピーから、そもそも「近代とはどういう時代か」、そして「近代建築とは何か」を発端として、絵画や文学・哲学そして建築の歴史的脈絡を辿り、そのうえで我が国の近代化の歴史のなかで、建築をとおして時代を生きた一人の人間としての「建築家・前川國男」が、それぞれの時代にどのような思いで建築に向き合ってきたか、その道筋のなかで学習院大学の建築に込めた前川の思いを語ることとしたのである。

すなわち我が国の近代建築史を俯瞰することで学習院大学キャンパスの明治・大正・昭和期の建築と前川の建築が歴史的脈絡でつながるという関係性の理解から、逆に前川の建築を語ることで明治期の建築を知るという視野が生まれ、前川建築の遺産価値の醸成につながると考えた訳である。

こうした視野は文学・哲学・政治・経済等の領域においても共通する姿勢と思っている。

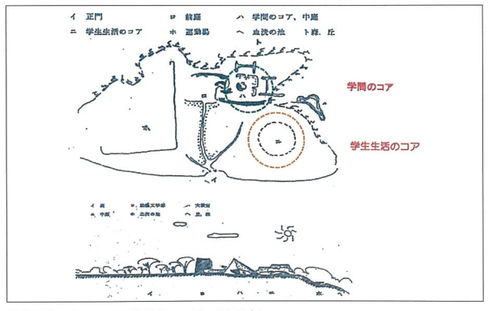
前川國男の学習院キャンパス計画

前川はピラミッド型の大教室について、「中庭を広々と感じさせるために4角錐としたが、大切なのは4角錐による象徴ではなく、人々を包み囲む広場なのである」と言っている。

前川のキャンパス計画は、キャンパスに2つの中心となる広場を設け、大教室のある中庭を「学問のコア」とし、北グラウンド側に「学生生活のコア」を設定し、いずれ増築されていく校舎群が、その過渡期においても、それぞれのコアを中心に年輪が拡がるような秩序ある風景をイメージしていた。

この2つの広場をコアとしてキャンパス全体を整備する計画は、史料館編の『学習院目白の学び舎』冊子によると、復元された1909年（明治42年）の目白キャンパスの配置計画にも、前川の計画とは位置も配置も異なるものの、共通する意図があったことが読み取れる。

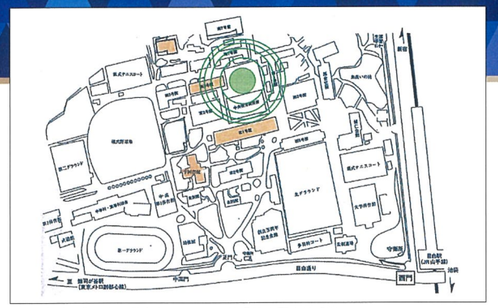
前川が明治42年のキャンパス配置計画を知っていたかは今となっては確かめる術はないが、先人が2つの広場を核としてキャンパス計画をイメージしていた事実からは、結果的に前川のキャンパス計画もまた同じ意図の継承と理解することができる。ならば現在の「ピラミッド広場」は、単に「前川のピラミッド校舎があった跡地」という記録の場所以上に、目白キャンパスの構成の歴史を物語る原型が引き継がれた記憶の風景の継承の場として、あり続けて欲しいと思う。



前川國男のキャンパス計画イメージ　1958年

シンポジウムのその先に

目前の受講者の反応を感じながらの講演会と違って、オンライン配信による講演は一方通行の感ありでなかなか難しいものであったが、それにしても講演開催にこぎつけた田上先生・史料館はじめ関係者の熱き思いと御尽力には敬意の念を禁じ得ない。今回の講演にあたって改めて61年前の竣工当時の前川建築関連資料を読み返し、また同時代の前川建築について再確認を行い、これをもとに講演会では前川建築に共通するデザインボキャブラリーの解説も行った。これは学習院大学にある前川建築を通してさらには全国に点在する前川建築への親しみを共有して欲しいとの思いによる。



2010年（平成22）の目白キャンパス　前掲書2頁より転載

今回は史料館編の『学習院目白の学び舎』冊子による目白キャンパスの変遷記録からは、多くのことを学ぶ機会を得た。その資料的価値はキャンパスにある歴史的建築物の解説に留まらず、時代を超えて育まれてきたキャンパス風景の歴史と同時に、特にこれからのキャンパスの在り様・方向性を考える上でも貴重と言えるところにある。

今回のシンポジウムを機に、今後学習院大学にある歴史的建築物と同時に前川建築について改めてじっくりと見て回りながら、自ら学ぶ学び舎が、いかに歴史と文化に恵まれた貴重な環境にあるということをより多くの学生が再確認するきっかけとなれば嬉しいことだと思う。

目白キャンパス　前川國男（1905－1986）建築一覧

竣工年	建物名（のちの名称）	
1960年（昭和35）	ピラミッド型大教室（中央教室）	解体（2001年）
	政経文学部棟（北1号館）	現存
	理学部棟（南2号館）	現存
	本部棟	解体（1991年）
1963年（昭和38）	大学図書館	現存
1983年（昭和58）	南5号館（大学計算機センター）	現存
1985年（昭和60）	男子高等科部室	現存

前川建築設計事務所にて
前川が使用していたデスクと椅子がそのまま使われている